

大妻女子大学図書館蔵「嫁入本万葉集」の書誌学的考察

倉住 薫

大妻女子大学文学部日本文学科

キーワード…万葉集、嫁入本、平仮名

抄録

大妻女子大学図書館に所蔵されている「嫁入本万葉集」の書誌と書写形式を明らかにする。大妻女子大学図書館蔵「嫁入本万葉集」の平仮名本文に漢字を付すという書写形式の独自性と、万葉集の本文・諸本研究における価値を位置づける。

はじめに

八世紀後半に成立したとされる万葉集は、漢字によって書き記された。その後、九世紀前半には仮名の使用が始まったことで、日本語の文字使用と万葉集の歌の文字状況には乖離が生じ、漢字のみで書かれた万葉集は、時とともに「訓み」「読む」ことが困難となった。天暦五年（九五二）年、村上天皇の勅命を受けた梨壺の五人によって万葉集の歌には訓点（古点）が付されたとされている¹⁾。こうした日本語書記史の中で書き写された万葉集の現存する写本の多くは、漢字本文に仮名で訓読を付す形式を基本とする。

大妻女子大学図書館には、本文が平仮名によって記された万葉集の「嫁入本」が所蔵されている（以下大妻女子大学図書館蔵「嫁入本万葉集」とする）が、万葉集の本文において、平仮名本文は、非常に特

異な形式といえる。

本稿では、平仮名本文に漢字を付すという特異な書式を有する大妻女子大学図書館蔵「嫁入本万葉集」の書誌情報を整理し、写本としての性質の一端を明らかにする。

一 大妻女子大学図書館蔵「嫁入本万葉集」の書誌

まずは、大妻女子大学図書館蔵「嫁入本万葉集」の書誌を整理しておく。以下に、略書誌を記す。

略書誌

○外題 「万葉集第一卷」～二十卷

○卷冊 二十卷二十冊

○寸法 縦十七・三cm、横十五・五cm

○表紙 藍の七宝繫ぎ(中央に点)地に双葉葵の緞子

○丁数 卷一・四三丁 卷二・六十丁 卷三・七八丁

卷四・七二丁 卷五・四七丁 卷六・六十丁

卷七・五一丁 卷八・六七丁 卷九・四六丁

卷十・七八丁 卷十一・六二丁 卷十二・四九丁

卷十三・四四丁 卷十四・三三丁 卷十五・四四丁

卷十六・四四丁 卷十七・五六丁 卷十八・四三丁

卷十九・六十丁 卷二十・八十丁

○一面行数 九行

○料紙 鳥の子紙

○箱 台輪付被蓋箱 中央に貼紙「万葉集 二十冊」

大妻女子大学図書館蔵「嫁入本万葉集」は、巻ごとの緞子の表紙に美しい装丁が施された、二十冊の柗型本であり、書き入れや印記などはない。見返しには、金布目地に、紅白梅・桔梗・水仙・朝顔・松などの草木や山川、家、などの景物(各冊ごとに絵柄は異なる)を描く。美しく巧みな筆致で書かれた「嫁入本」として作成され、箱に入れられ丁寧に保管されていたことをうかがわせる。

二 万葉集の「嫁入本」の書写形式

「嫁入本」とは、江戸期に大名や公家の娘などの高貴な女性の嫁入道具として作成された美麗な調度本である。流麗な書風で書かれ、美麗な装丁を施し、彩色された絵入り本などもあり、漆塗りの蒔絵の箱に納められることが多い。八代集や源氏物語などの中古文学作品が題

材となることが多いが、万葉集の「嫁入本」も確認されている。

万葉集の「嫁入本」に関する言及は、万葉集の本文校訂の重要な基礎資料である『校本万葉集』を作成した佐佐木信綱によっても行われた。佐佐木は、自身が目にした万葉集の「嫁入本」について「美しい事は美しいが、本文は多くは流布本を寫したもので、學問的には價値はまづ無いというてよいものである」と、その写本的價値を否定的に述べる^[20]。

だが、時雨亭文庫の公開や広瀬本の発見によって、近年の万葉集の諸本研究は、小川靖彦らを中心とし、新たな展開を見せている^[21]。本文校訂に資するかどうかには拘わらず、写本としての價値が問われ、その本自身の調査研究が非常に重要なものとなった。平安期から江戸期にかけての諸本伝本研究が盛んになり、万葉集の写本の本文のあり様が明らかになってきた。

こうした諸本研究の中で、二〇一七年九月二二日には、万葉集の「嫁入本」が、万葉古代学公開シンポジウム「万葉集をよんだ人々・人々のよんだ万葉集」において取り上げられた^[22]。万葉集の写本研究においても江戸期の伝本として「嫁入本」はその價値を見いだされてきている。すでに複数の「嫁入本」が確認されていることから、「嫁入本」は「工房」によって「生産」され、「需要もあつたことと想像」されている^[23]。つまり、まだ確認されていない万葉集の「嫁入本」が多数あり、調査の進展によって、万葉集の受容形態をより明確にする可能性がある。大妻女子大学図書館蔵「嫁入本万葉集」も、この未確認の「嫁入本」の一つに当たる。

さらに万葉集の「嫁入本」には、他の諸本にはない、漢字本文に平仮名傍訓という形式をもつものがあることが田中大士によって明ら

かにされ、それらは万葉集の写本形式においては「稀な付訓形式」と位置づけられた^{〔六〕}。

万葉集写本の書写形式は以下のように整理できる。

①平仮名別提訓…古点本—桂本

・次点本—藍紙本・元暦校本・金沢本・天治本

尼崎本・類聚古集・嘉暦伝承本・

伝壬生隆祐筆本

②片仮名別提訓…次点本—伝冷泉為頼筆本・広瀬本

・新点本—細井本（巻四〜六、十七）

③片仮名傍訓…次点本—春日本・古葉略類聚抄・紀州本

・新点本—神宮文庫本・細井本（巻一〜三、七〜一

六、一八〜二十）・学習院本・西本願寺

本・陽明本・大矢本・近衛本・京都大学

本

万葉集写本には、漢字本文と別行に訓を提示する「別提訓」形式と漢字の傍らに訓を付す「傍訓」形式とがある。書写形式は、①平仮名別提訓→②片仮名別提訓→③片仮名傍訓という順序で変遷したことが推定されている^{〔七〕}。万葉集の「嫁入本」は、田中の調査によると江戸時代に流布した版本である活字附訓本あるいは寛永版本（底本は活字附訓本）を底本としたとされる^{〔八〕}。江戸期の版本は、③片仮名傍訓の形式であり、版本をそのまま書写すれば、漢字本文に片仮名傍訓となるはずであるが、「嫁入本」には六本の平仮名傍訓本が確認されている。この平仮名傍訓は、現存する万葉集の写本においては「嫁入本」でしか確認されていない。田中の調査によると「嫁入本」と版本の書式は丁の様相・行配り・行送りなどが一致することから、「嫁入本」

は版本を「傍訓形式は改めず、訓を片仮名から平仮名に変えて写した本」である^{〔九〕}。版本の片仮名傍訓を「嫁入本」では平仮名傍訓に変えて書き写す行為は、「嫁入本」独自の書写態度に基づくものと言える。江戸時代の高貴な女性の嫁入道具の飾本として作成されたため、「嫁入本」では、流麗な書風が生きる平仮名に書き改められたのであろうか。

平仮名への書き換えを行う書写意識は、万葉集の諸本伝本研究においても、重要な視点となる。さらに、漢字本文を平仮名本文形式へと書き換えた想定される大妻女子大学図書館蔵「嫁入本万葉集」は、書写意識を探る上でも、万葉集の諸本研究においても、重要な写本であると考えられる。

三 大妻女子大学図書館蔵「嫁入本万葉集」の書写形式

大妻女子大学図書館蔵「嫁入本万葉集」は、巻一の奥に「文永十年八月八日」の日付、「文永三年八月十八日」の仙覚の奥書、巻三の奥に大伴旅人・山上憶良・藤原不比等の伝、巻二十の奥に「文永三年歳次丙寅八月廿三日」の奥書を記す。通常、万葉集版本の巻二十の奥にある、桑門寂印と僧都成俊の奥書は、記されていない。

目録・題詞・左注の本文は基本的に、平仮名と漢字交じりで記され、漢字の右側に平仮名訓、平仮名本文の右側に適宜、漢字が付されている。歌は、基本的に平仮名で記され、平仮名本文の左側に適宜、漢字が付されている。

以下に、巻一・一番歌、八四番歌、巻二・一〇四番歌、巻三・三〇八番歌、巻四・五七〇番歌、巻五・八〇六番歌、八〇七番歌、巻十四・三三〇番歌、巻二十・四五一六番歌の翻刻を挙げる。

○巻一・一番歌

雑歌

はつせあさくらの宮あめのしたしろしめす

朝倉 御宇

天皇の代 大泊瀬稚武天皇

天皇御製 哥

こもよみこも ちふくしもよみ ふくしもち

このをかになつむすこ いへきかな

岳 菜採 家

つけさね そらみつ やまとのくには

告 山跡

をしなへて われこそおらし つけなへて

押 居 告

われこそおらし われこそは せなにはつけめ

座 背

いへをもなをも

○八四番歌

寧楽の宮

長皇子と志貴のみこと佐紀の宮に

てともにとよのあかりします哥

宴

あきされはいまもみることつまこひに

秋 去 妻

しかなかんやまとたかのはらのうへ

鹿 原

○巻二・一〇四番歌

ふちはらのおとしこたへたてま

夫人 和

つる哥一首

あかをかのおかみにはいひてふらしむる

岡 〔※「岡」異体字〕

ゆきのくたけしそこにちりけん

摧

○巻三・三〇八番歌

ときはなるいはやはいまにありけれと

常盤 石室

すみけるひとそつねなかりける

○巻四・五七〇番歌

やまとへにきみかたてる日ちかくなれば

山迹辺 乃近

のいたつしかもゆるきてそなく

鹿 動 〔※「鹿」異体字〕

○巻五・八〇六番歌

たつのまもいまもみてしかあをによし
ならのみやこにゆきてみんにも

○八〇七番歌

うつゝにはあふよしもなしぬはたまの
よるのいめにをつきてみえこそ

○巻十四・三三四八番歌

東歌

なつそひくうなかみかたのおきつすに
ふねはとゝめんさよふけにけり

右一首かつさの國哥

上総

○巻二十・四五一六番歌

三年春正月一日いなみのくにの

まつりことやにて饗あむしを国郡司等みこともぢらに

廳

たひてとよのあかりの哥一首

賜 宴

あたらしきとしのはしめのはつはるの

新年 始

けふふるゆきのいやしけよこと

右一首守おほとものすく

大伴

ねやかもち作之

家持

大妻女子大学図書館蔵「嫁入本万葉集」は、歌を高く書き、題詞・左注を低く書く。題詞や左注は、諸本において、全体的な訓読が施されないことが多いが、一番歌・四五一六番歌の翻刻を示したように、訓読が付されている。

また、巻一・八四番歌、巻二・一〇四番歌、巻三・三〇八番歌、巻四・五七〇番歌、巻五・八〇六、八〇七番歌は、版本に訓読が付されていない歌であるが、独自の平仮名本文が書かれている。特に、版本だけでなく現存諸本にも見られない「あかをかの」「にはいひて」「一〇四」「たてる日」「ちかくなれば」「ゆるきて」「五七〇」「みてしか」「みんにも」(八〇六)という訓が付されていることは重要である。こうした訓が、参照した本によるのか、あるいは、書写者の独自訓なのかは、さらなる調査が必要である。

漢字が付されるのは、万葉集の漢字本文の訓仮名や、人名・地名などの固有名詞が多い。一字一音の音仮名で書かれる巻十四のような歌は、基本的には平仮名本文で書かれ、漢字を付さない傾向にある。巻十四・三三四八番歌のように、人名・地名の固有名詞には漢字を付すが、それ以外には、三八四一番歌の左注「あきらかに」の左に「詮」の漢字が付されるのみである。巻二十・四五一六番歌のように、訓仮名と音仮名が交じる歌は、平仮名本文で書き、左側に漢字を付す。

また、本文・訓読に異同がある箇所につけられた漢字もいくつか確認

できている。今後、全体の調査にもとづき、詳細データを公開する予定である。

大妻女子大学図書館蔵「嫁入本万葉集」は、平仮名本文の左側に漢字が付されており、万葉集の写本・版本からも、「嫁入本」の書写形態からも逸脱した特異な書写形式といえる。

万葉集の「嫁入本」の底本となるのは、平仮名傍訓の「嫁入本」と同じく、作成時期にすでに流通していた版本（活字附訓本あるいは寛永版本）の可能性が高い。おそらく大妻女子大学図書館蔵「嫁入本万葉集」も、江戸期に流通していた版本を書き写したものと推測できる。ただし、大妻女子大学図書館蔵「嫁入本万葉集」では、訓読が記されない題詞や版本に訓読がない歌も訓読されている。書写者に漢字本文を読み下す技量が備わっていたとも考えられるが、版本以外の参考資料を参照した可能性もある。

片仮名傍訓を平仮名本文に書き変えたことが想定される大妻女子大学図書館蔵「嫁入本万葉集」の書写態度は、万葉集の他の「嫁入本」が、傍訓を片仮名から平仮名への書き変えた以上に、大きな変革といえる。

さらに、大妻女子大学図書館蔵「嫁入本万葉集」は、平仮名本文の右に漢字が書かれる箇所があり、〈漢字傍訓〉とでもいえるべき書写形式となっている。書き写すだけでなく、平仮名に書き変えながら、必要な箇所に漢字を書き記している。こうした書写態度は、万葉集の歌を理解し、注を付ける意識と近いともいえる。

今まで確認されてこなかった平仮名本文に漢字を付す形式で書写された大妻女子大学図書館蔵「嫁入本万葉集」は、万葉集の諸本研究において、新たな視点をもたらす写本としての価値を認めうるもので

ある。

なお、全体の翻刻や最終的な調査成果に関しては、しかるべき媒体で公開する予定である。

引用文献

- 〔一〕上田英夫（『萬葉集訓点の史的研究』塙書房、一九五六年、第一篇第二章、第三篇第一章）
- 〔二〕佐佐木信綱「万葉集の嫁入本」（『萬葉漫筆』改造文庫、一九三七年、一三五―一三七）
- 〔三〕小川靖彦『萬葉学史の研究』（おうふう、二〇〇七年二月）
- 〔四〕第一五回万葉古代学公開シンポジウム「万葉集をよんだ人々・人々のよんだ万葉集」（二〇一七年九月二二日開催、乾善彦・田中大士・池原陽齊・大石真由香・樋口百合子・景井詳雅）。その成果が『万葉古代学研究年報』（二〇一九年三月、一七号）にまとめられている。
- 〔五〕乾善彦「万葉集をよんだ人々・人々のよんだ万葉集―付、万葉文化館蔵万葉集および万葉集関連書籍」（『万葉古代学研究年報』二〇一九年三月、一七号、一一一―一一九）
- 〔六〕田中大士「新たな万葉集伝本群の発見―万葉集平仮名傍訓本―」（『万葉古代学研究年報』二〇一九年三月、一七号、一二一―一四〇）
- 〔七〕田中大士「万葉集伝来史上の広瀬本万葉集の位置」（『国文目白』二〇一七年二月、五六号、一四―二二）
- 〔八〕田中注〔六〕論文
- 〔九〕田中注〔六〕論文

付記

本研究は、大妻女子大学二〇二〇年度戦略的個人研究費 (S200522) の助成を受けたものです。

(受付日:二〇二一年七月二十六日、受理日:二〇二二年八月十八日)

倉住 薫 (くらずみ かおる)

現職:大妻女子大学文学部日本文学科准教授

國學院大學大学院博士課程後期単位取得退学。博士 (文学)

専門は万葉集を中心とした日本上代文学。

主な著書:『柿本人麻呂―ことばとこころの探求―』笠間書院、二〇一一年一月

A bibliographic study of “Yomeiribon Manyoshu”Collection of Otsuma Women's University Library

Kaoru Kurazumi

Department of Japanese Language and Literature, Faculty of Language and Literature,
Otsuma Women's University
12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan 102-8357

Key words : Manyoshu, Yomeiribon, Hiragana